



Title	中国延辺朝鮮族における韓国語使用の動向
Author(s)	全, 永男
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49120
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	全 永 男
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 1 5 3 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 19 年 9 月 26 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	中国延辺朝鮮族における韓国語使用の動向
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 真 田 信 治 (副査) 准教授 渋谷 勝己 教 授 土 岐 哲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国延辺朝鮮族自治州に住んでいる人々の、近年注目されている韓国語使用傾向について、その動態を究明したものである。

中国と韓国の国交が成立して 15 年を迎えるが、中韓両国の様々な分野における交流の拡大に伴って、延辺朝鮮族自治州も経済、文化など諸方面で韓国からの影響を大きく受けつつあることが指摘されている。その中で近年、延辺朝鮮族の人々の間に韓国語使用の動きが見え始めているのである。

本論文は、「はじめに」と本論の 4 部（1～9 章）、及び「おわりに」からなる。

まず第 1 部（第 1・2・3 章）においては、延辺朝鮮族の歴史的概要、この地に居住する朝鮮族の人々の言語使用の状況、及び本研究での調査方法などについて詳述している。

第 2 部（第 4 章）においては、延辺朝鮮族自治州及び韓国への好悪感情、延辺朝鮮語と韓国語のイメージ、韓国語の能力、韓国語の使用実態、延辺朝鮮語の将来、といった角度から行った調査に基づいて、延辺朝鮮族の人々の韓国語に対する言語意識を分析している。ここから、現段階の延辺朝鮮族の人々にとっての韓国語という存在は、マスコミの用語として、「きれい」、「優しい」と感じる理想的な言葉であるとされるものである一方で、同じ民族でありながら社会制度が異なり経済的に優位な国の言語として、違和感のある言葉でもあることが明らかになった。理想化された韓国語と現実としての韓国語、この違いによって延辺朝鮮族の人々の韓国語への思いが揺れているのである。

第 3 部（第 5・6・7 章）においては、延辺朝鮮族の人々同士の談話資料と比較しながら、対韓国人談話場面における延辺朝鮮族の人々のスタイル切換えの事例、また、延辺朝鮮族の接客言語行動の事例について分析している。特に職場における言語行動に関して、ホテルと銀行ではソウルの表現が多用されるが、職場においては全般に延辺朝鮮族の人々同士の日常会話と同様、ソウルの表現の使用は少ないことが明らかになった。

そして第 4 部（第 8・9 章）においては、延辺の新聞メディアにおける流入韓国語による延辺朝鮮語の変化パターン、流入韓国語の内訳、流入韓国語が延辺朝鮮語に与える影響、の 3 つの側面から分析し、流入韓国語には韓国語系外来語が最も多く、その中でも、経済、流行、生活に関する用語が、流入韓国語全体の 7 割以上を占めていることを明らかにしている。また、延辺朝鮮族の日常会話における言語実態について、世代別、地域別、男女別に分析している。その結果、流入韓国語は主に若年層で、中国語は中年層で、延辺朝鮮語は高年層で多く使用されていることを明らかにし、特に女性の若年層における流入韓国語の使用が目立つことを指摘している。なお、語彙の選択は生活地域

と密接に関係している。朝鮮族の人口が多く、また韓国との交流が盛んな延辺の首府（延吉市）に近ければ近いほど、流入韓国語の使用率は高い。その逆に、朝鮮族の人口が少なく、首府から離れていればいるほど、中国語の使用率が高くなるのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、社会言語学における言語接触研究の立場から、中国延辺朝鮮族自治州をフィールドに、この地の人々の言語使用意識とその使用実態を記述したものである。

延辺朝鮮語と韓国語はもちろん同じ体系の言語でありながら、発音法、綴字法、語彙などにおいて、それぞれ独自の標準をもっている。ところが、中韓両国の交流の拡大に伴い、延辺朝鮮族自治州は、近年、経済や文化など、諸方面で韓国からの影響を大きく受けつつある。それは言語についてもまた同様である。この地の人々の間に韓国語運用への動きが見え始めているのである。ただし、そのことについては、必要性を感じながらも、韓国語に対して、ほかの言語への思いとは異なる、一種の違和感、距離感を感ずる人が存在し、一部にはこのような韓国語運用の傾向に強い抵抗感を持つ人もいるのである。

本論文は、その葛藤の様相をさまざまな調査法を駆使しつつ詳細に描いている。現時点における言語接触の実相の一端が明らかになった。もちろん、本論文は言語政策面の史的記述や調査項目の選択、調査対象者の数などにおいて、まだ不十分なところが多い。今後のさらなる調査研究、また継続的な調査研究が必要であろう。

本論文によれば、延辺朝鮮族自治州における韓国語運用と同様の動きが、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）でも観察されはじめているとのことである。北朝鮮のピョンヤン語は延辺朝鮮語が標準と仰いできた言語である。北朝鮮における言語変化の研究が注目されるのである。本論文は、今後の朝鮮半島における言語動向を見極めるための的確な参照枠を提供するものである。また、言語接触論の研究にも貴重な貢献をなすものとなっている。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。